

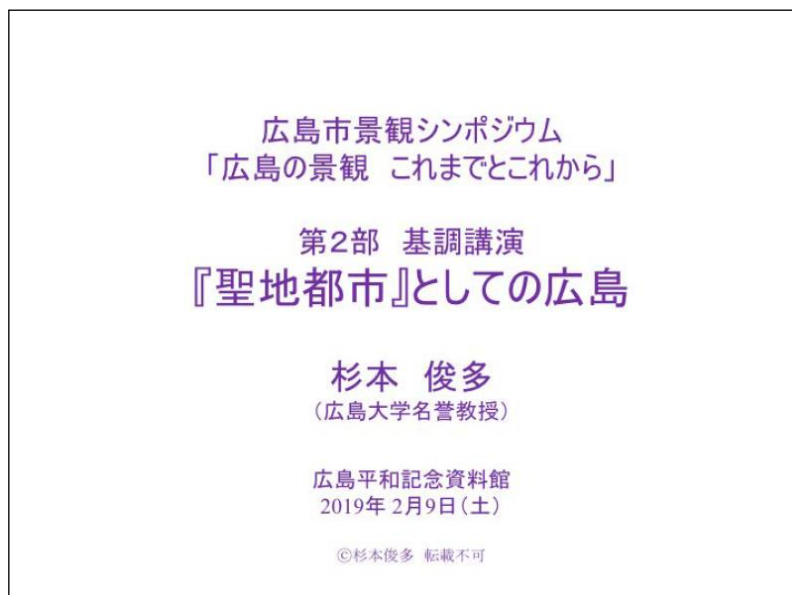
平成30年度 広島市景観シンポジウム

「広島の景観 これまでとこれから」

日 時 平成31年 2月 9日（土） 13時30分～16時

場 所 広島平和記念資料館東館

地下1階 メモリアルホール



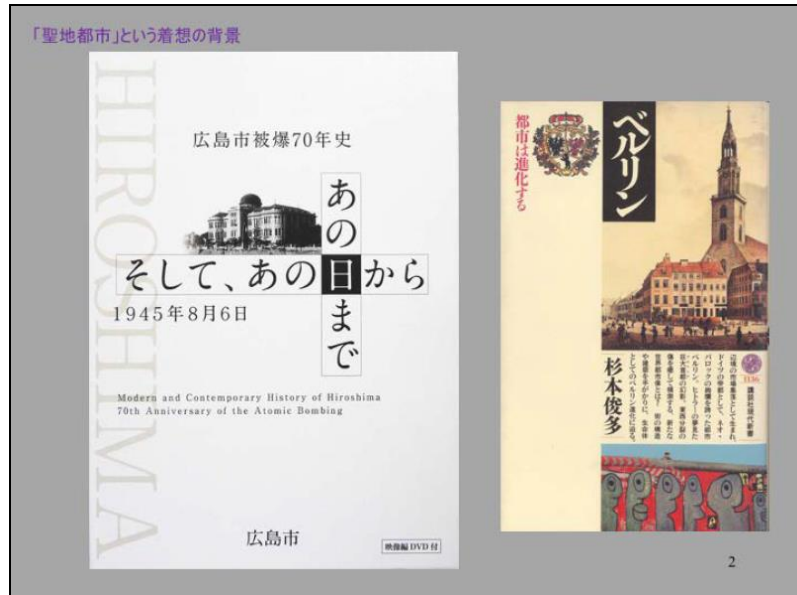
## 第2部 基調講演

「『聖地都市』としての広島」

### ○杉本俊多

御紹介いただきました杉本です。

今日は「『聖地都市』としての広島」というお題をいただきました。先ほど御紹介いただいたとおり、広島市の景観行政の関係でいろいろと協力させていただいてる中で、私個人としていろいろ考えるところがあったりしまして、そういうところをもとに、今日お話しさせていただきたいと思います。



まず最初に、昨年、広島市から出版されました、広島市被爆70年史、「あの日まで、そして、あの日から」というタイトルで、かなり分厚いものを出版しております。ごく一部ですけど、私も執筆させていただきました、その執筆の過程でいろいろ考えたことがありまして、きょうも、その関係のことで、少しお話を中でさせていただきます。

そのようなことをしたところ、中国新聞でコラムを書かないかというお話がありまして、そのときに、8回分ほどのコラムを書いたんですけども、聖地都市について考えるという、「聖地都市考」というタイトルの文章を書かせていただきました。そのときに、また、いろいろと考えたことがありまして、読んでいただいた方もいらっしゃるかと思いますけども、もう少し深くといえますか、私の考えたところを、聖地都市という言葉でどういうことを考えてるんだということを御紹介したいなと考えてます。

画像で、右側に「ベルリンー都市は進化する」というタイトル、これは講談社現代新書で、もう随分前に書いたものです。ちょうどベルリンの壁が崩壊する前後に書いていたものですが、それをもう一遍頭の中で思い起こしました。ベルリン、20世紀、大変な悲劇の都市でありましたけれども、壁が崩壊して統一される過程で、私のこの本は、中世からの歴史を、建築という立場ですので、いわゆる歴史じゃなくて、都市デザインの歴史という見方でもって整理したものです。そのときに、都市は進化するというイメージを非常に強く持ったものですから、こういうサブタイトルをつけさせていただきました。

簡単に申し上げますと、あらゆる都市は進化していると。広島も進化していると考えたいなど。そうすると、それぞれの時代にさまざまな都市のあり方があるんですが、その時代に合わせてものの考え方も変わっていく、都市の形も随分変わっていくものだというこ

とであります。そういうことで、現代の広島を考えるときに、どういう意味の都市であろうかということ。簡単に言いますと、「聖地都市」という言葉で言ってもいいんじゃないかと考えたということです。

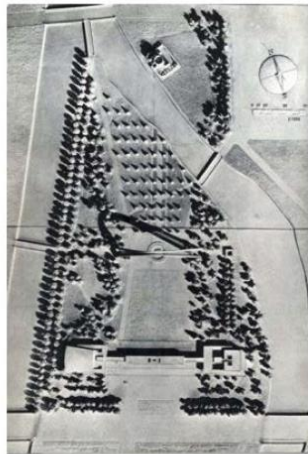
最近は、いろいろと脳科学関係の本が、テレビでも脳科学の学者さんがコメンテーターで随分出てきたりしています。聖地という言葉は私は使ってるけど、決して、いわゆる古い宗教都市という意味で使ってるんじゃないくて、人間というのは頭の中で聖なるものをいつも考えてるということです。そういうところから説き起こしていますので、むしろ未来都市的な意味で「聖地都市」という言葉を考えてるところもあります。その辺のところ、ちょっと誤解されそうな言葉なんですが、私の言葉だと理解していただけたらと思います。

御存じのとおり、広島、被爆して70年。私の建築という専門の立場で考えるときには、この70年という時間をかけてつくってきた今の広島は、かなり、もう、ある意味ではよくできた都市になってきているという考え方をします。復興から始まって、この後、申し上げますけども、戦後すぐに、大変立派な、一種の理想都市計画のようなものが広島でつくられていると。それが、今、70年たって、多分、日本の中でもほかの都市にはない独自の優れた価値をつくってきている。それが今の都市の形、あるいは景観にも随所にあらわれていると考えております。それは未来都市という意味で、広島の「聖地都市」という姿になる、その土台はもうある程度でき上がってきてるんじゃないかという考え方をします。広島市でいろいろ努力されて、景観をどうするのかとずっと考えて、いろいろ施策をされてきている。なかなかうまくいかないところもあったりするかと思いますが、方向性は非常にしっかりしたものが既にできていて、これからさらに、どうまちをデザインしていくかというテーマが、今、21世紀においてどうするかというテーマが上がってきてるのではないかと考えてます。

## 丹下健三による 広島のパランドデザインと平和公園

3

### 公園空間のデザイン・コンセプト



#### 設計意図について:

「……平和記念公園は、世界的な意味を持つであろう。……平和は訪れて来るものではなく、闘いとらなければならぬものである。」  
「……いま、建設しようとする施設は、平和を創り出すための工場でありたいと考えた。……平和を記念する「精神的な象徴」の意味を帯びてくる……。」  
「造園計画は……四つの基本的な施設（記念館-広場-祈りの場所-原爆の遺跡）を自然な環境のなかに包み込むことである。」

（丹下健三「広島市平和記念公園及び記念館競技設計当選図案」『建築雑誌』、日本建築学会、第756号1949年11月号40-43頁より。一部、現代語に改編。）

#### 原爆ドームを見通す軸線を設定した理由:

「都市計画的に見て、100m道路がやはりベースになる。……それから原爆ドームをどう扱うかはなかなか出てきませんでした。しかし最終的に、100m道路と垂直な軸を基本にして展開しようと……。でもだいたい後になって気がついたんです。最初から気がついたわけではない。」

（丹下健三、藤森照信著『丹下健三』、新建築社、2002年、139頁。藤森照信、松葉一清のインタビューに対する答え。）

そういう意味で、まず戦後すぐ、ある種の理想都市計画だと言っていると思うんですけども、広島で、丹下健三という建築家が考えたことが、もう一遍見直してみる必要があるのではないかと。先ほどの被爆70年史の中で、少し、私の文章で、そのこの景観について詳しく書かせていただいていますので、もし御興味があれば、改めて読んでいただきたいと思います。きょうは、そのエッセンスのところを話をさせていただきます。

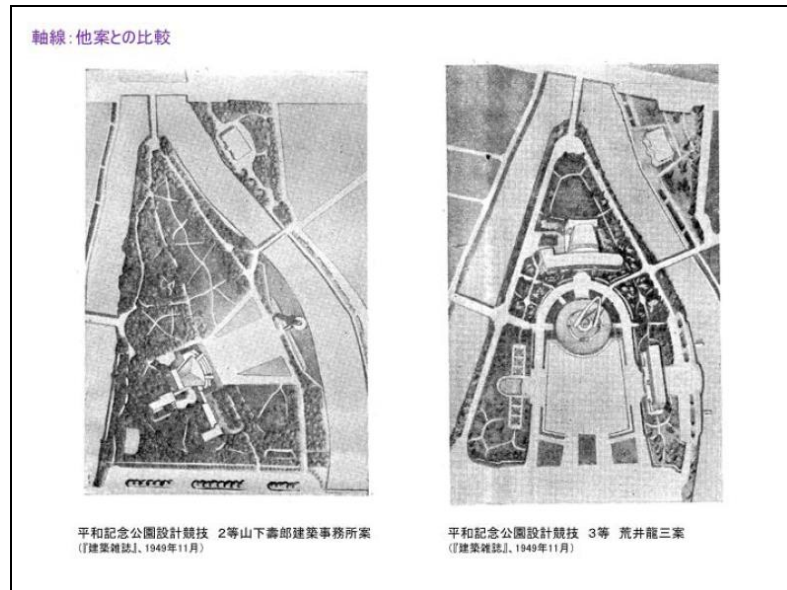
ちょっと字が小さいかと思うんですが、1949年に平和記念公園の競技設計というものがある全国規模で実施され、当時の日本建築学会がバックアップして、全国的な大きなある種の動きになったことがあります。その競技設計の結果、丹下健三さんの案が一等になって、今、我々がおります平和記念公園の形が始まったこととなります。

そのときに、1949年といいますと、終戦からまだ4年しかたっていないころですから、

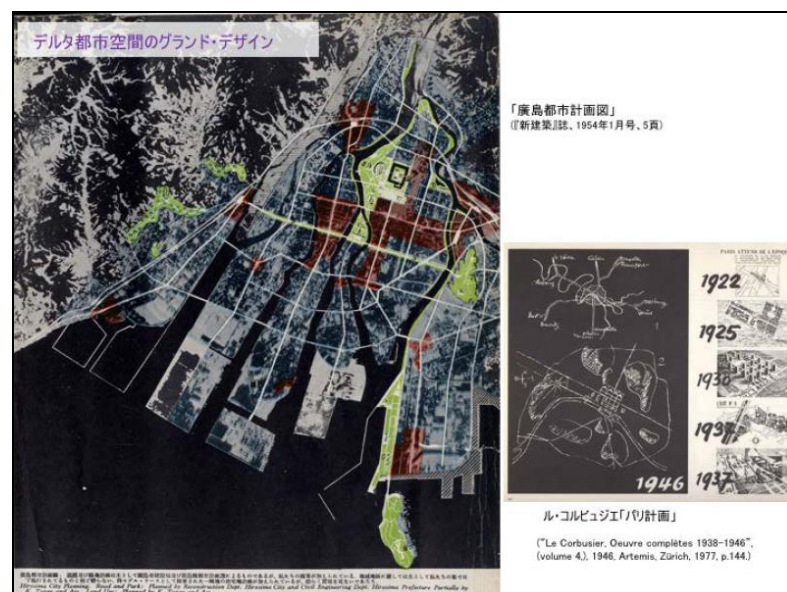
(我々から見れば、私も戦後生まれなもので、ちなみに私は1950年生まれなものですから、まだ、ちょうどそのころになりますけれども、) どういう考えをされたのかが、私なんかでも、我々の世代にはよくわからないところがあるんです。少し深く、当時の丹下さんの書かれたものを読み直してみまして、気になるところを。

設計意図について書かれていることで、「平和記念公園は世界的な意味を持つであろう」「平和は訪れてくるものではなく、闘いとらなければならないものである」「今、建設しようとする施設は、平和をつくり出すための工場でありたいと考えた」「平和を祈念する精神的な象徴の意味を帯びてくる」「造園計画は、4つの基本的な施設(記念館—広場—祈りの場所—原爆の遺骸)を、自然な環境の中に包み込むことである」と書かれています。1949年の当時の日本建築学会の建築雑誌という名の機関誌に書かれています。

それから、もう一つ、これは別の、新しくといいますか、2002年に藤森照信さんが編集して出版されました「丹下健三」という分厚い本の中で、インタビューに答えてもらって。原爆ドームを見通す軸線を設定した理由はということだったのですかということに対して、「都市計画的に見て、100メートル道路はやはりベースになる。」平和大通りが基本だということです。「それから、原爆ドームをどう扱うかはなかなか出てきませんでした。しかし、最終的に、100メートル道路と垂直な軸を基本にして展開しよう。でも、大分後になって気がついたんです。最初から気がついたわけではない」と。つまり、都市デザイン、広島都市全体のことを、平和大通りを軸にと考えられて。それに対して平和記念公園をどう置くかということで、今、左に、模型にありますような軸線を描いてると、たまたま原爆ドームにうまく線が伸びたという。丹下さん自身にとっても大変な発見だったんだろうと思うんですが。そこから、この広場、公園のデザインを、幾何学的なデザインでやられてるということになります。



比較のために別の案を見てみます。左は山下壽郎の案となっておりますけど、軸線は斜め向いてます。右側は荒井龍三案ですが、これは、軸線は南北に向いてるんですが、原爆ドームは少し横っちょになってる。なので、こういうのを比較して考えると、丹下さんが何を考えたのかが非常によくわかる。比較で見ただけだと思います。

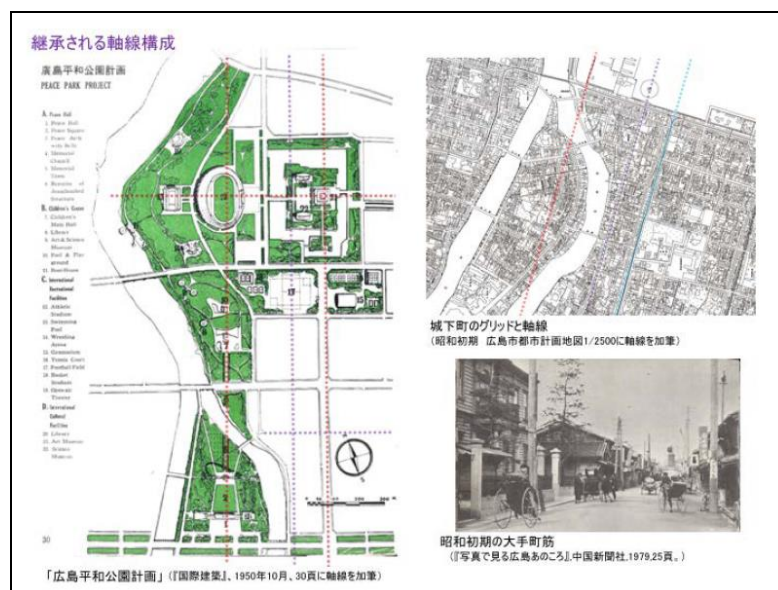


それから、当時、丹下健三さんの作業といいますか、広島市の復興のための都市計画的なことで助言をされてたことがあります。こういうプラン、いわゆるグランドデザインといたらいいんだろうと思うんですが、広島デルタ全体について、どうしようかと考えて絵を描かれていたこと。これもあわせて考えておく必要があるのかなと。決して、平和記念公園だけのこと、あるいは平和記念公園も独立して単独のものとして考えてらっしゃったのではなくて、広島デルタ全体の空間デザインということになります。もちろん、



空間デザインは景観デザインにも入るわけですが、そういう作業をされてたということになります。

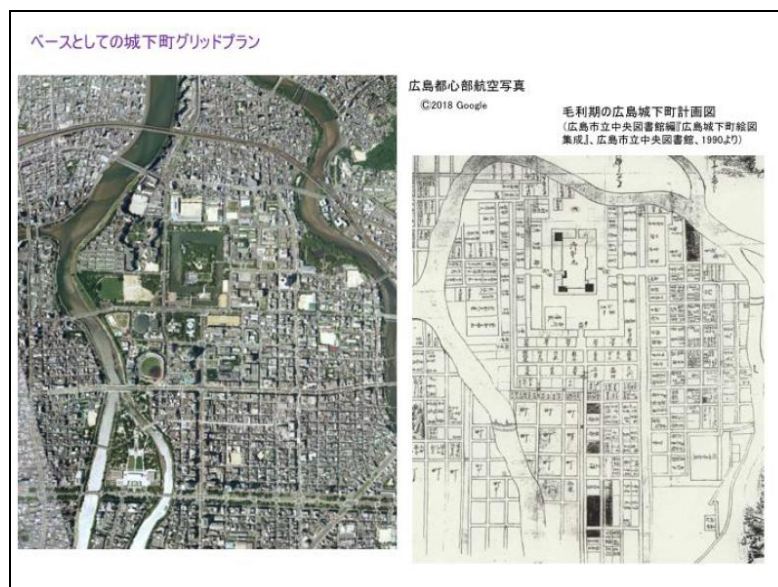
実は、右側に挙げてますのは、ル・コルビュジェとって、20世紀を代表する世界的なフランスの建築家の戦後パリの都市改造デザインです。当時、まだ丹下健三さんは30歳代の終わりごろだったかと思うんですが、大変な影響を受けていらっしやったので。実は、その影響がある程度見えるということです。詳しくは、時間がないので先に進みますけども。



その軸線を使った計画、よく見ると、左側は、当時、丹下さんが描かれた、もちろん丹下さんが一人ではなくて、当時の県庁、市役所の皆さんと一緒に作られた当時の案です。中央公園というので、今の広島城及び基町あたりを含めた広大な地域についての大きな案をつくられていた。この辺は幾つか紹介されているところです。

私が申し上げたいのはまちの軸線です。今の鯉城通り。実はこれ、その間にあるのが大手町の軸線なんですけど、大手町は、よく見ていただきますと、天守閣をアイストップにした、いわゆるビスタといいますけども、見通し。日本の都市デザインの歴史には非常に内容があるものがありまして、安土桃山時代の城下町のデザインを知るときに、こういう見通し、イタリア語でビスタとっておりますが、そういうやり方を、実は、日本中のまちでやってるということです。広島でも、大手町の南北軸は、天守閣を遠くに見えるような配置をしていたということがあります。そういうことを考えると、決して丹下さんの考えられた軸線は、丹下さん個人が考えたということではなくて、広島をしっかりと読み込んでおられる。それで、戦後の復興計画、一種の理想都市計画を作成するときに、その

歴史も含めた、非常に総合的な物の考え方をされてたことがわかるということです。



その辺の絵ですけど、これはまさしく桃山時代、秀吉の影響を受けた毛利輝元が、広島に、デルタにやってきて、吉田の方からこちらにやってきて、新都市計画をつくる、城下町をつくる時に描かれたと言われている絵図です。今のGoogle Mapでわかるものと比較して、かなりよくその辺が継承されてきていることがわかります。もちろん、時代の変化に伴って大きく近代化してきていることは確かですけど。



もう一つ、丹下さんのデザインで、都市スケールじゃなく建築のスケールでおもしろいのがあります。足もとの、ピロティーというんですが。左側に、ル・コルビュジェが、マ



ルセイユ、フランスでつくっていた、当時まだ建築中の建物を実際に見に行ったことがあったようです。足もとのデザインもかなり似たような形にしていることがあります。

余り時間がないので、はしょっていきますけど。

実は、3段階、案が変わっております。最終的に、非常にダイナミックな足元のデザインになっておりまして、それはなぜかと考えると、丹下健三さんは、ル・コルビュジェと、もう一人、ミケランジェロに非常に心酔してたということがあります。



1930年代に、丹下さんの、雑誌に書かれたものをコピーして持ってきてますが、ミケランジェロのフィレンツェの彫刻とか、サン・ピエトロ教会。これはイタリアのローマの少し南にあるパエストゥムという、古代ギリシャ人がイタリアにつくった神殿です。こういうものを挙げておられまして、建築のある種の質というものが、平和記念資料館、この建物もそうですけど、隣の建物に非常によく考えて反映させてることを確認できるということです。

## ローマ(およびヴァチカン)の 都市デザイン

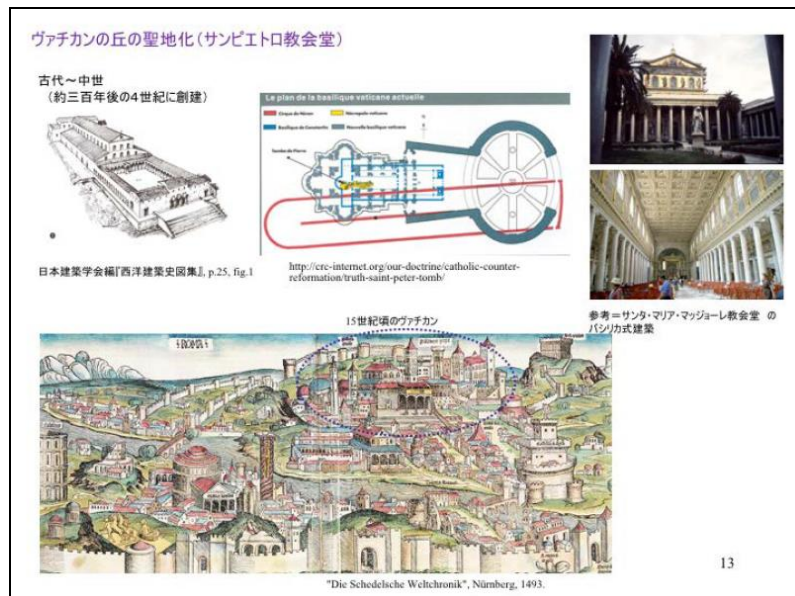
11



続きまして、話を「聖地都市」というタイトルでするとき、どうしても、やはり事例が欲しいなということで、ローマを参照させていただきます。ローマというと、ほとんど現代の観光都市、日本人の多くの方は観光に出かけると思います。キリスト教の方はバチカンへ宗教的な関係で行かれることがありますけど。私なんかも、実は、昨年11月に、たまたまローマに行って、サン・ピエトロ教会堂とかバチカンも、かなり走って見てきたんですが、その写真も少し加えております。

現在のイタリアの首都でもあるし、やっぱり世界の、ある種、リーダーの都市の一つでありますけども。その由来を考えると、基本は、まずは古代ローマ帝国の都市、首都ロ

ーマということに始まり、ローマが衰退するにともなって代わるように、キリスト教徒のまちになるということです。



これ、私の大学でやってた建築史の授業の絵を少しあわせて使わせていただきます。

最初に、バチカンに教会が建ったのは、4世紀、コンスタンティヌス大帝がキリスト教を公認したところで、初めてバチカンに教会が建ちました。それまでは、サン・ピエトロのお墓があったというだけの、一種の共同墓地であったわけです。そのときの教会の形がどうだったかということ、こういう形だったと。今は、サン・ピエトロではなくて、やはりローマにあるサン・パウロ教会と、サンタ・マリア・マッジョーレという教会に名残があるんですが、今のサン・ピエトロ教会は、随分、建てかえてます。

ちなみに、これ、中世のバチカンの雰囲気を描いた15世紀の絵です。



今、我々が知ってるバチカン、サン・ピエトロ教会堂はミケランジェロの設計です。あるミケランジェロの資料を掲載してる大きな書籍、学術的な本を参照しました。こういうスケッチが保存されています。ミケランジェロの手描きのドームの断面とか、そのほかの各所の設計の設計過程が見えます。御存じのように、システィーナ礼拝堂を画家として壁画を描いて、本来は彫刻家ですが、画家として描いていました。その後も、かなり高齢になったので、かなり辞退したようですが、何としても建築設計してくれと言われて始めたということです。残念ながら、建築物としてドームが建ち上がる前に、ミケランジェロはもう亡くなってるという状況になってたということです。

教会が、このところで、サン・ピエトロ教会が大きく建てかわる。その建てかわり方が、一言でいうと、ルネサンスという時代の宗教もほとんど変わってしまっている。御存じのとおり、ミケランジェロがシスティーナ礼拝堂に描いた人物の姿はほとんど裸体だったということで、キリスト教という中で果たしてどうかと、随分すったもんだになった歴史があったりします。

我々が一般に見に行くサン・ピエトロ教会堂は、多分、ルネサンスの状況を見に行ってるので、必ずしも宗教的にどうのこうのということではないんです。つまり、ローマという都市が非常に目まぐるしく変化していくと。目まぐるしくといっても2000年かかってきてるんですが、現代もさらにもう一步の進化を遂げると。先ほど、都市は進化するという言葉を申し上げましたが、ベルリンの話で。やはりローマもかなりある進化を遂げているし、今もまだ進化をしてるんだと思ったほうがいいんだろうと思います。それは

宗教都市というだけではなくて、いろんな意味での進化なので、現代の社会にとって都市がどうあるべきかということに対応した変化だと考えたらどうかなと思います。



ちなみに、ミケランジェロがドームをつくったんですが、その後、手前のほうは、またその後の時代に、後といっても、もう、すぐ後の17世紀の時代、バロックという時代に別の人がつくったと。広場もベルニーニという彫刻家として有名な人物がつくって。そのときに、非常にはっきりとした軸線を広場に生み出して、こういう見方ができるようになった。

これは、実は11月に撮ってきた新鮮な写真ですけど、ドームの上から見ると、軸線が非常にはっきりと見えるということになります。少し遠くから、川辺のほうから見ると、こういう軸線でもって、軸線の焦点のところにサン・ピエトロ教会堂が見えるということなんですが、こうなったのは、前のところまで来たのは20世紀になってからでして、随分変化があったということになります。





ちょっと小さくなってしまいますが、バチカン、サン・ピエトロ教会堂がありまして、古いローマ、コロッセオとその他の古代ローマ時代の遺跡があつて、まちが、これも歴史的なゾーンですので、もちろんローマは、歴史都市として、新しい建物が建たない、建築家ができる仕事はインテリアしかないことになっていきますが、そういうまちがあつて、そういうところに軸線が交差してるのが、ローマの、今、我々が見るまちの特徴です。



これはもちろん、偶然にできたものではなくて、バロックという時代に、ここで黒い線を引いてあるのが、シクストゥス5世という教皇が命じたといいますが、ローマの大改造を行ったときに指示した新しい街路です。古い街路もありますね、済みません。新しい街路をつけ加えて、象徴的な軸線街路ということになります。当時描かれた、これはバチカンの壁画でいっぱい描かれているものですが、こういう軸線があつて。これは、ちょっと

見にくいですがけれども、軸線のところに、サンタ・マリア・マッジョーレ教会という、やはり4世紀に、古代につくられた、最初につくられたときの教会の一つです。

オベリスクは、エジプトからローマ帝国の時代に持ってきたものですが、オベリスクをアイストップにするというやり方をします。



その中でも一番際だってるものがポポロ広場。この辺が、南北で、これに対して南のほうの古いゾーン、古代ローマの中心部のゾーンですが、それに対して、今、一点の焦点。これは古い道がローマ時代からあったのですが、新しい道を加えて三本の道にして、広場をつくり、オベリスクを建てまして、対称形に二つの教会をつくるというやり方をしています。先ほどから、イタリア語でビスタという言葉を使うと言っておりますが、実はこういうふうに道路を見通して、はるか遠くまで見通しができる、そういう価値観、見事な見方、こういうのをビスタといいまして、とりわけ重要な都市デザインの手段になります。

遠くで見にくいですが、ここを拡大しますとこうなります。ちょうど今は、ヴィットーリオ・エマヌエーレ(二世)という19世紀にイタリアを統一した人物の記念碑で、今、ローマの一番目立つものになっています。そもそもは、古代ローマのフォロ・ロマーノというのがあって、その後ろの小山になります。これも、そのビスタの中でうまく取り込むと。



ビスタという言葉の建築史の説明みたいになりますけども、本来は、庭園のデザインでこういうやり方が。ローマの郊外のティヴォリというところがあって、そこに、ルネサンスからバロックの時代にかけてつくられた邸宅と庭園があるんですが、それにおいて、そのビスタというものがうまくつくられたということで、大変に有名なものになっております。



そういうのを都市計画に、都市デザインに応用するのが、イタリアから始まってヨーロッパ中に広がるんです。例えば、カールスルーエというドイツのまちで、宮殿の前に扇型の広場をつくって、まちをつくり、一直線の道を後で追加してるんですが、こういう光景をつくることをしてます。





これも同じような方法ですが、アメリカが独立した直後、ワシントンDCをつくった際に、見事なビスタ計画をつくってということでもあります。これは古いオベリスクでなくて、新しく、中に入って展望台まで上がれるということです。

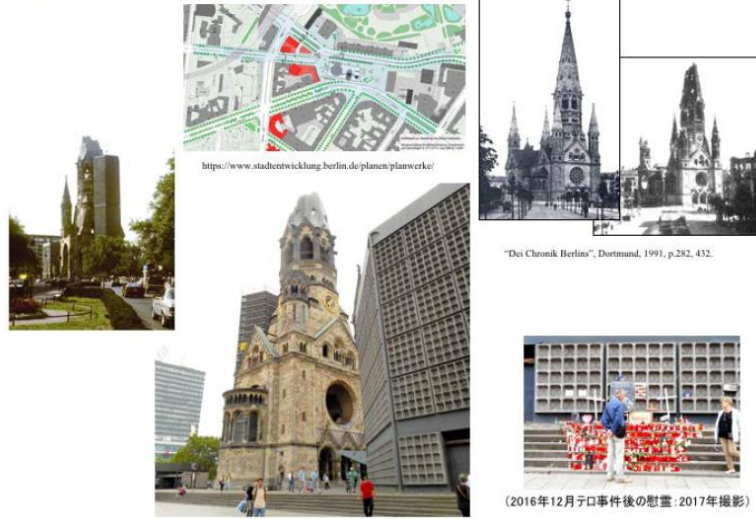


パリは、バロックの時代と19世紀の時代に、盛んにまちをデザインし直したということで、有名なのがオペラ座の前の通りです。これは御存じのとおり、シャンゼリゼにつながる、エトワールがあるところです。

## 現代ベルリンの 景観デザイン手法

23

都市的ランドマークとしての戦争警鐘記念碑  
(旧ヴィルヘルム皇帝記念教会堂)



こういうふうに、ヨーロッパといいますか、特にイタリアからになりますか、都市デザインの手法というものが広がってきまして、我々、近代になって、日本も似たような手法をとり始めて、明治期の東京の駅前のデザインなんかでも、同じような幾何学的なピスタの計画をしたりということになったんです。

改めて、ベルリンの話に戻るんですが、都市は進化するという言葉、少し説明があんまりできなかつたですけども、ベルリンというのは、中世に始まって、近世、近代、現代と、かなり激動の歴史をたどってきたのは御存じかと思えますけれども、都市の形においても、そのような変化をしております。

ベルリンが統一されたとき、つまり壁が壊れた後、ある種、ハッピーな都市が生まれたと。つまり、かなり難しい都市であったのが、そういう障害がとれて新しい都市になった。



すっかりその新しい都市にしちゃってもよさそうなところですが、実はさまざまの深い考えといますか、私が言う「聖地都市」。聖地という意味では、ベルリンはやはり新しい聖地という発想で捉えていい、そういう都市であろうと考えているんですが、戦後すぐに、まずは、いわゆる戦争記念碑を保存する。つまり原爆ドームと同じような発想ですが、教会が空襲でやられていたものを、その形をおよそ残して、新しい教会を両方に挟むように新しい形で作ってるんですが、そういうふうにして平和を象徴するような都市にしようということがありました。



ベルリンでは、そのほかに、第二次大戦後の姿をどうするかというのが、かなりすったもんだ、いろんな案が上がりました。

(1999年には) 世界遺産に博物館島が登録されます。島というのは、川の中州があって、そこに博物館が幾つか集中してる地区があるんですが、その世界遺産の幾つかの博物館のうちの一つに、ノイエス・ムゼウムというのがあります。見ていただいたらわかるとおり、傷ついた状態がわかるように改修をするやり方をしているということ。つまり、単純に新しくきれいにしてしまうのではなくて、その傷跡をある種の記録として残し、美術館ではあるんですが、ノイエス・ムゼウムについては、古代エジプト系の美術館になっておりますけども。

そのためにどういうデザインをしたらいいのかということで、イギリス人の建築家が採用されてということです。我々の用語でミニマリズムというんですが、できるだけ新しいものが、いかにも私がつくったよと見せないようにして、既存の古いものを表に、前に出すように見せるというデザイン。非常に見識のあるデザインだと思いますが、そういうやり

方をしています。



そのほかですと、有名なブランデンブルク門です。実はブランデンブルク門の前に、これは廃墟になったときの、第二次大戦直後の写真ですけど、実は正方形の広場がありました。これは長い歴史がありまして、17世紀あたりにつくられてる。数百年の歴史があるんですが、正方形の広場、ほかには丸い円形の広場、八角形の広場と三つあるんです。名前はパリ広場といいます。何でパリというかと言うと、ベルリンからパリへ行くときにこの門から出ていくんだという意味で、ヨーロッパではそういう名前のつけ方をするんです。廃墟になったものをどうするかというので、ごらんのように、スカイラインと統一する。窓の形は縦長で、いわゆる古典的な形にする。縦横の線をそろえるということ。

ここに図面を出してありますが、これはベルリンの市役所をつくったものです。都市計画局で、日本ではBプランという言い方をするんですが、地区詳細計画です。完全にここはこんな形にきなさいというのを決めてしまうんです、形を。それぞれの部分部分は好きなようにデザインしてもいいですよ、ただしルールがありますよというので。図面になって、実は横っちょにルールが文章でずらっと書いてあるんですけど、そういう都市計画をするときの手段になります。なかなか日本ではそこまで理解できないといいますか、比較的そんなに厳密に、ここはこういう形にするということをしなさいです。ヨーロッパではよくやるやり方で、ベルリンでは、まさに復興するやり方の中で、そういうものを改めて駆使して、新しいまちのデザインをしてるということです。

ここにちらっと見えてるのは、建築関係の方だとわかると思うんですが、フランク・ゲーリーというアメリカ人建築家です。とんでもなくカオス的なデザインで、スペインのピ

ルバオの美術館なんか有名ですが、外観は全くそのルールに従って、非常にきちっとやっています。先ほど申し上げましたミニマリズムという発想も入っております。ただ、一步中へ入ると、びっくりするような極限の空間が出てくるんです。なるほど、ゲーリーだなと我々は思うわけです。ただ、ルールを決めたときには、そのルールにきちっと合うようにして、かつ美しい、ルールの中で最も美しい形を追求してるという、こういう考え方が、非常に、私にしてみれば、日本の建築家もこういうのを学んでほしいなと思ったりするところなんです。



そのほか、「ベルリンの壁」です。あちこち、何か所も壁を残してあるんですが、これは割合有名だと思います。ちなみに、実は、これは私が27歳のとき、留学してたときに撮ったものです。まだ壁が壁として機能してた時代の、非常に鬼気迫るものです。

そのほか、こちらは、いわゆるゲシュタポのあった場所のすぐ前で、壁とともに、そのゲシュタポは何をしたかという一種の、英語でいうとドキュメンテーション・センター、ドイツ語では、ドクメンタツィオーンス・ツェントルムという言い方をしますが、ベルリンではこういうのをやってるんです。ほかのまちでも、同じような第二次大戦の、いわゆるファシズム、ナチズムに対する警鐘という場所を必ずつくっています。そういう形で壁もあわせて使っている。



さらに、これは非常におもしろいと思うんですが。壁がある、大変悲劇的な、壁を乗り越えて殺害された人たちがいるという、実は悲劇的な場所です。ここにはこういう建物が建ってた場所ですが、そこを非常に気持ちのいい公園にしている。芝生があって。デザインも、新しい教会とかも。非常に新しい、木造であったり、土を使ったり、エコロジ的な建築ですが、そういうやり方をしてます。なるほど、ベルリンはよくやってるなど感じさせられます。

## 広島の平和都市デザイン

現代建築デザイン(爆心地への視線軸)



話が少しはしより気味で申しわけないんですが、最後に、広島で、これまでどのようにしてきてるかという中で、特に建築デザインについて見るときに、改めて、御存じの方もいらっしゃると思いますが、確認したいんです。現代美術館、比治山の上にありますけども、円形をここにカットしスリットを入れている。これは爆心地の方角に開くようにということ。御存じのとおり、ムーアのアーチも、やはりその方向に向かって、先ほど言ったビスタという眺望、見通しの眺望を展開しています。

それから、吉島の中工場、ごみ工場ですけれども、こちらは谷口吉生さんの設計で、吉島通りですか、の軸線を非常に意識したとおっしゃってました。平和記念公園と同じ軸線じゃないんです、少しずれるんですけども、この軸線はやはり平和記念公園に向かっての意味を持つんだとおっしゃる。つまり、それぞれの、一個一個の建築の設計するときに、一つ一つそういう発想すれば、広島らしいデザイン、あるいは広島の、あえていうと「聖地都市」としての広島をつくり上げていくための、一つ一つの貢献になるような作業をされてきているというので、大変、我々は敬意を持って見たいなと思います。





それから、広島近現代建築の歴史のようなもの、先ほどの被爆70年史に書かせていただいたんですが、改めて考えさせていただいて。広島出身の建築家で、広島をどう扱ってるといいますか、広島でどういうつくり方をされてるかを見ますと、ということです。

最も象徴的なのは、村上徹さんの御自身のアトリエの建物です。いわゆる打ち放しコンクリートの非常に清楚な外観、それから、形も幾何学的で透明感がある。先ほどミニマリズムという言葉を行いましたけども、自己主張を余りしないで周りを生かすということです。この場合は、大変緑が生きてる、むしろ建築よりも緑を生かしてる。建った当時は、もう少し木が低かったかと思うんですが、最近見るとこういう形になっています。

あと、木材を使った三分一さんのデザインとか。広島に、ある種の、広島独特の、平和都市だからこそだと言いたいんですけど、ある種の倫理観のあるデザインがそろってるなと思ったりします。

ちなみに、こちらは鈴が峰の住宅団地と基町ですけども、これは藤本昌也さん独自の発想で、広島のためにというので設計されてきてる。全体に、いわゆる目立とうというよりも、むしろ都市をどのように生かしていくかという非常に謙虚なデザインの仕方、設計の姿勢だと思います。

こういう発想を、改めて、丹下さんの七十年ぐらい前に考えられた理想都市の案を、あるいは考え方をもう一遍思い返しながらか、これから21世紀の広島をデザインしていければいいなど、私自身、考えておりました、それを希望しております。

被爆建物・樹木：観光施設デザインの可能性



被爆建物。これから、ベルリンでやってるような古いものを生かしながら、その歴史の建物を全面に出していけるようなやり方ができればいいなと。これは希望ということで話を終えさせていただきます。

以上で私のお話とさせていただきます。御清聴ありがとうございました。